

五大州 — 鎖国時代の世界地理認識 —

表象文化学部・日本語日本文学科 吉野 政治

【要旨】 大航海者たちによって次第に明らかにされつつあった世界の姿は利瑪竇（マテオ・リッチ）の世界地図の形で日本にも伝えられたが、それに対する反応はさまざまであった。あるいはその実証性を高く評価し、これまでの仏教的世界像を妄説として切り捨て、あるいは逆にこれまでの世界像を維持し、西洋の世界像を国家を乱すものとして排斥し、あるいは西洋から新知識を日本国の他国に優れている証拠として活用した。本稿では、新しい世界像が鎖国の日本の中でどのように定着していったかを追跡しつつ、その過程で繰り返し表明された疑問について取り上げる。それは利瑪竇の世界地図において世界が五大州（五大陸）に分けて説明されていることに対する疑問であるが、これは西洋におけるキリスト教的世界観についての無理解によるものと考えられる。

【キーワード】

鎖国 世界地理 五大州 利瑪竇（マテオ・リッチ）『坤輿萬国全図』

1

鎖国の時代であっても平戸や長崎出島の狭い門から西洋の知識は流れ込んできた。大槻玄沢が「和蘭実測窮理のこともは驚き入りしことばかりなり」『蘭学事始』文化十二年（1655）と刮目したように、それらは実証的に裏付けられた全く新しい知識であった。世界は須弥山が聳え立つ巨大な円盤の南方海上に人の住む南瞻部洲があるといったようなものではなく、宇宙に浮かぶ手鞠のようなものの上に五つの大州があり、天竺震旦日本はその中の一つの州を形成するものに過ぎなかった。三浦梅園の『原價』（安永二年（1781）刊）に言う。

天文地理ノ学、梵最粗ナリ。漢ハ寝精シ、然レドモ思量模索ニ出テテ実測ニウトシ。西洋ハ器ヲ制シ、舟ニ駕シ足跡至ラザルノ地ナシ。ココニ於テ天地ヲ見

ルコト掌菓ノ如シ。実ニ千較ノ大愉快ナリ。山片蟠桃（『夢之代』享和二年（1812）自序・文政三年（1820）自跋）にも、これまでの知識がいかに信じるに足りないものであるかを次のように述べる。

地理ノコトニヒテハ、古ヘサマザマノ説アリテ、ミナ妄説ナルコト、今ヲ以テ引合セミルベシ。鄒衍ガ赤黒神州ヨリ、ソノ外経史ニ載ル処、後世ニ合フコト希也。漢ノ張騫、西域ニ通ジテ見ル処ノ国々ハ、実ニ踏処也トイヘドモ亦杜撰多シ。況ヤ山海経ノ如キ、一モ取処ナキヤ。其大荒・海外ノ経ハ妄作スルコトモアルベシ。四方山経ノゴトキハ、漢土九州ノ内ニアラズヤ。況ヤ亦中山ニヒテヤ。ミナ其人物鳥獸ノ異形、コレヲ何トカ云ン。郭璞ハ晋人也。コノ時ノ人コノ書ヲ見テ、ヨク作り並ベタリト笑フテ過ベシ。然レバ今ノ源氏・伊勢ノ類ナリ。今浄瑠璃ナル本ヲ見テ、畠山ノ重忠、実ニ阿古屋ヲ琴責ニシ、塩治判官ノ臣大星由良之助、実ニ高ノ師直ヲ討テ仇ヲ復セシト云ガゴトシ。シカルニ後儒、山海経ヲ引キテ、扶桑国・君子国・倭国ノ我ノ風俗ニ異ナリナド、不審ヲ記スガゴトキハ、イカナル見ナルヤ。実ニ兒女ノ浄瑠璃ヲ信ズルガゴトケンカ。夫西洋ノ諸国、梵天・和・漢ノ文盲ト違ヒ、又杜撰、妄説、詐偽ヲ禁ジ、実地ヲ踏マザレバ書スルコトナシ。ユエニ此ノ学ヲ以テ正トスベシ。

（卷之二・地理第二、第十九項）

蟠桃が扱った西洋の知識は次のような経緯によって我が国に伝わったものであった。

明ノ崇禎ノトキ利瑪竇ナルモノ来リテ曆書ヲ訳ス。ソレヨリ天経或問出テ、後、地球ノ四方二人ヲ立セテ、外面ミナ上ニシテ、四方六合皆人ノ立ツヲシルス。職方外史ノ書アリテ、図説トイヘバ本図アルコトナルベケレドモ、国禁ナルユヘシルコトナシ。新井氏采覧異言ヲツクル。コノ書ニ因ナラン。コレヨリ万国ノコト明ラカナリ。

（同右、第一項）

すなわち日本の洋学は新井白石の『采覧異言』『西洋紀聞』から始まる。大槻修二（如電）編『日本洋学年表』（明治十年（1877）刊）にも次のように書かれている。

洋学ノ起源ハ宝永中新井白石翁力采覧異言ヲ著シ、ヲ始トナシ其講読翻訳ノ業

ヲ起シ、ハ皆其後年ニアレハ此年代ヲ始トナス可シ。

その新井白石が見ていた世界図がどのようなものであったかは『西洋紀聞』から知ることができる。言うまでもなく、『西洋紀聞』は宝永五年（1708）に屋久島に上陸したローマ法王庁派遣の宣教師シドッチ（Juan Baptista Siotu 1668—1715）を白石自身が訊問した時のことを書いたものである。その書に言う。

① 萬国の図を携ゆきて、其図をしめしてたずねとふに、此図は、此土にしてしるされし所なれば、精しからずといふ。奉行所に、ふるき図ありと聞えしかば、かさねては、其図を出さるべしと相約したりき。（上巻）

② けふは、かの奉行所にある所の万国の図を出されしをもて、彼地方の事をとふに、事明らかにして、異聞ども多かりき。此図は七十余年前に作りし所にて、今は、彼国にも得やすからぬ物也。こゝかしこやぶれし事、惜しむべき事也。修補して後に伝へられるべしなど申す。（上巻）

③ 按ずるに、大西洋地球地平等の図、その由来る所、いまだ詳ならず。大明・吳中明、萬国坤輿図に題して「歐邏巴國中。鏤有旧本。蓋其國人。及弘郎機人。皆好遠遊。時經絶域。則相伝而誌之。積漸年久。稍得其形之大全」といふ。我、今、大西人に遇ひて、歐邏巴鏤板の輿地図を出して、其説を問ふに、彼其図を見て、これ七十年前、ヨ、ランドヤ人の鏤し所なり。其精妙いふべからず。今は西洋地方にも得易からざる所也といふ。…今其ヨ、ランド鏤板の図に抛りて、萬国坤輿図、並に三才図絵・月令広義・天経或問・図書遍等に見えし所の図を見るに、皆其大略をしるせしのみ也。（中巻）

①に見える白石所有の「萬国の図」は、③に見える「萬国坤輿図」のことであり、イタリアのイエズス会の宣教師利瑪竇（マテオ・リッチ Matteo Ricci 1552—1610）が製作し、漢文の説明が付されている『坤輿萬国全図』（一六〇二年刻板）である。また、阿蘭陀人から將軍家に地図が贈呈されたのは明暦・万治・寛文年間に数度あったようだが、②の「奉行所にある所の万国の図」すなわち③の「歐邏巴鏤板の輿地図」「ヨ、ランド鏤板の図」は寛文十二年（1672）に献上されたもので、一六三九年（寛永二十六）刻板のヨアン・ブラウ（Joan Blou ？—1680）の東西半球図であろうとされる。したがって、シドッチの訊問の時よりあるいは約百年、あるいは約七十年前のものであった。しかし、いまだ洋字が開けなかった時代であり、白石はなお旧舶来の『坤輿万国全図』などによって、『西洋紀聞』や『采覧異言』を書くしかなかったのである。ちなみに、かのザビエルが鹿児島に上陸したのは天文十八年（1549）、フロイスが織田信長に謁見したのは永祿十二年（1569）である。し

かし、鮎沢信太郎氏が言うように「地球図の伝来は織田信長、豊臣秀吉の頃にあつたと云はれるが、恐らくこれをまのあたりに見ても、それが何であるか理解することは困難であつたらう」（『日本文化史上における利瑪竇の世界地図』pp. 99—100）。すなわち白石の『西洋紀聞』以前には、世界の地理に関する認識に影響を与えるものとはならなかったのである。

シドッチに対した白石の世界地図がその当時如何に古いものであつても、「鎖国日本にまがりなりにも、実証的な世界を紹介したのは利瑪竇の世界図に始まる」（鮎沢氏）と云うことができる。

2-1

その利瑪竇の『坤輿萬国全図』（稿末の【世界図Ⅱ】）に書き込まれている漢文說明の中に、

以地勢二分輿地為五大州、曰歐邏巴、曰利未亜、曰亜細亜、曰南北亜墨利加、曰墨瓦蠟泥加。

とあるように、世界は「欧邏巴」（ヨーロッパ）・「利未亜」（リビア・アフリカの漢語名）・「亜細亜」（アジア）・「南北亜墨利加」（南北アメリカ）・「墨瓦蠟泥加」（メガラニカ）の「五大州」からなるものであった。このうち、メガラニカは後の航海者によって幻の大陸であることが判明するが、この地図では次のように説明されている。

墨瓦蠟泥加州

南北亜墨利加、並墨瓦蠟泥加、自古無人知有此處。惟一百年前歐邏人乘船至其海邊之地方一知。然其地広闊而人蛮猾、迄今未詳審地内各人俗。

墨瓦蠟泥加

墨瓦蠟泥、係弘郎幾國人姓名。前六十年始過此峽、並至此地。故歐邏巴士以其姓名、名峽、名海、名地。

此南方地人至者少。故未審其人物如何。

ちなみに、このメガラニカに関する海峡や海や大地の名前となった「弘郎幾國人」は、ポルトガル人航海家 Magalhães マガリャンス（1480—1521）のことである。英語読みで Magellan マゼランであるが、イエズス会のスペイン語読みでは Magallanes マガヤネー又は マガラネーであり、これを漢字表記したのが「墨瓦蠟泥」すなわちメガラニである。

本稿は、天竺・震旦・本朝（朝鮮は一国とは見なされていなかった）のみが世界であった日本に、この利瑪竇の世界図がどのように浸透していったかを跡づけてみようとするものである。ただし、人文学的な知識については触れず、世界に存在するという「大州」の数とそれが具体的に何を指しているかに関してのみ追うことにする。「大州」は「大洲」とも書かれるが、引用では原文の表記を尊重し、地の文では利瑪竇が用いている「大州」を用いることにする。

2 1 2

新井白石とほぼ同じ頃、西洋の天文地理等についても多くの著作のある西川如見がいる。彼の『増補華夷通商考』（宝永五年〔1708〕）に掲げられている「地球萬国一覽之図」（稿末の【世界図Ⅲ】）もまた利瑪竇の『坤輿萬国全図』の流れを引くものである。その西川如見以降、明治維新以前までの間で、管見に入った世界の大州の数とその名称を記した日本人の著作を、およその時代順・人物別に紹介すると次のようになる（引用文で漢文で書かれているものについては私に句読点などを付し、後の説明の関係で注目すべき箇所には傍線を付す）。

1 西川如見

『日本水土考』元禄十三年（1700）序、享保五年（1721）刊

渾地の図を閲するに大瀛海の裏、陸土自ら相絶えて三大界と成れり。第一界は、中帯赤道の北に在りて、径度極めて大なる者を使ち分画して三洲と作す。曰く亜細亜、曰く欧羅巴、曰く利未亜。第二界は利未亜の西に在りて、赤道の南北に横はる者を亜墨利加と曰ふ。第三界は赤道の南に在りて広く相連れる者を墨瓦臘尼と曰ふ。

総て是を五大洲と為すなり。萬国各々五大洲の内に在り、亦許多の島嶼は各々その界洲に属す。俗の所謂世界とは異なり。

『四十二国人物図説』正徳四年（1714）序・享保五年（1720）刊

渾地五大洲

亞細亞洲 唐土天竺韃靼等属此大洲

利未亞洲 自天竺西方至南方之界

歐羅巴洲 在天竺之西北一界

亞墨利加洲 在於日本東南一界

墨瓦臘尼加洲 自赤道至南極之一大界

2 新井白石

『采覧異言』正徳三年（1713）自序、享保十年（1725）頃定稿？

美、嘗聞西人輿地之説。曰天形渾円。地居其中。海水相附。共為円体。中略：若夫地既為円体。固無上下方隅。姑從人所居。乃分五大州。以爲兩界耳。蓋南北極界。又各有大州。而生人已來。足跡未到之所。置而不論。此其大較也。

『西洋紀聞』正徳五年（1715）成、享保九年（1724）頃定稿？。刊行は明治十五年（1883）

大地、海水と相合て、其形円なる事、球のごとくにして、天円の中に居る。たとへば鶏子の黄なる、青き内にあるがごとし。其地球の周囲九万里にして、上下四旁、皆人ありて居れり。凡其地をわかちて、五大州となす。一つにエウロハ、漢に欧羅巴と訳す（中略）二つにアフリカ、漢に利未亜と訳せるは、即此。三つにアジア、漢に亜細亜と訳するは、即此。○阿蘭陀鏤板の図に拠るに、以上三大州、共に一圈の内にありて、地上界とす。四つにはノルト・アメリカ、番語ノルトといふは、此には南といふ。漢には南亜墨利加と訳す。即此。五つには、ソイデ・アメリカ、ソイデといふは、此に北といふ。漢に北亜墨利加といふ。○阿蘭陀鏤板の図によるに、以上二大州、共に一圈の内にありて、地下界とす。

亦按ずるに萬国坤輿図に、欧羅巴、利未亜、亜細亜、南北亜墨利加の外に、墨瓦臘尼加の一州を加へて、六大州とす。

3 松村元綱

本木良永の『和蘭地図略説』明和・安永年間（1765—1781）成

輿図之伝尚矣。明万曆中、意太里人利瑪竇航海、抵中華。為萬国全図、言天下有五大洲。邇來華人所刻海外地図者、往々而出焉。雖然然之愈失眞実。

4 平賀源内

『火浣布略説』明和二年（1765）刊

凡世界を四ツにわり、ゑろつば、あぢや、あふりか、あめりか、といふ。

5 杉田玄白

『解体新書』安永三年（1774）

天所覆、地所載、分レ之為四大州、一云亜細亜、二云欧羅巴、三云利未亜、四云墨瓦臘尼加。

6 三浦梅園

a 『原價』安永二年(1774)刊

混地ノ体円ニシテ海水コレニ湛フ。其内大壤ニツアリ。一ツハ北ニ在テ、東西ニ長シ。一ツハ中ニ当ツテ、南北ニ長シ。北ニアル壤ヲ三大洲トス。西ヲ歐羅巴、和人エロツパトモ云。即西洋也。喞蘭地ナドモ其中ナリ。東ヲ亜細亜、唐日本天竺ナド其内也。東西ノ中間ナルヲ漢人利未亜ト云。西洋ノ人ハアフリカト云。中ニ当ル壤ヲ二大洲トス。南ヲ南亞墨利加ト云。北ヲ北亞墨利加トス。又南大海ノ中墨瓦臘泥加ト云地アリ。昔西洋ノ人見ツケテ、コレヲ加ヘテ六大洲ト云シガ、追尋ネ見シ所、殊ノ外ノ小島トモイヘリ。因テ大洲五トス。

b 『帰山録』安永七年(1779)刊

渾地ノ六大洲ト云ハ亞細亞、利未亜、歐羅巴、南亞墨利加、北亞墨利加、墨瓦臘泥加ナリ。これを地図に考ふるに、島として、海中に布散する多しといへども畢竟大壤は三つなり。先、北壤、中壤、南壤なども謂べし。

7 前野良沢

『管蠡秘言』安永六年(1777)誌

六大洲 一曰亞細亞。二曰歐羅巴。三曰亞弗利加。四曰南亞墨利加。五曰北亞墨利加。六曰墨瓦臘泥加。

8 林子平

『輿地国名訳』安永六年(1778)刊

亞細亞 歐羅巴 亞弗利加 北亞墨利加 南亞墨利加
※「南亞墨利加」の説明の中に「墨瓦臘泥加」「墨瓦臘泥加海」がある。

9 大槻玄沢

『蘭説弁惑』(天明八(1788)序

全体此世界と云ふ者を四つに分ち、是れを四大洲といふ。其西に在る一大洲を歐羅巴と云ふ。…唐山は亜細亜といふ一大洲に属し、東へ寄りたる国ゆえ、我国へは海程甚近し。阿蘭陀地方へも地つゞきなれども、阿弗利加歐羅巴の三大洲の諸国を隔てたれば、道程数万里にして容易に至るべからず。…此話意を用る人々には弁するにも及ばぬ事なれども、唐山も和蘭も一樣に覚えたる愚かなる婦女子の輩に其のあらましを説き示す事なり。是等の世界物語は図を出し置いて示さざれば、茫然として理會し難し。故にこゝに萬国略図を出して示す。合せて考ふべし。

『環海異聞』文化四年(1807)誌・首卷「序例附言」

此天地世界は自ら四大洲に分ちたるもの也。遠西の人、四方に航海して此理を窮めしとぞ。唐山にて明朝の末にいたり、西洋人内地に入りて其図説を示し、人始て知れりと見ゆ。其四大洲とは一に曰「アジア」明人亜細亜又亜裔亜と音訳す。(中略)二に曰「アフリカ」明人亞弗利加又利未亜と音訳す。(中略)三に曰「エウロツパ」明人歐羅巴と音訳す。(中略)四に曰「アメリカ」明人亞墨利加と音訳す。此洲、南北二大洲に分る。南北両洲を算ふれば五大洲なり。

10 司馬江漢

『輿地略説』寛政四年(1792)刊

則其国土を分て五大洲と名け、所謂亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、亞墨利加、墨瓦臘泥加、なり。

『和蘭天説』寛政七年(1792)刊

地球ノ中ノ国土ヲ名ケテ五大洲トス。西洋ノ諸國ヲ歐羅巴ト云、支那・日本・天竺・鞭而靉ノ地ヲ亞細亞ト呼ビ、南ニ出デタル國ヲ亞弗利加ト云。二百九十年前始メテ見出シタル地ヲ亞墨利加洲ニシテ、南北二國アリ。是ニシテ四大洲ナリシヲ、南極ノ方広大ノ地アリ。墨瓦臘泥ト云人始メテ見出ス。故名トス。シカレドモ未開ノ地ナリ。

『地球全図略説』寛政九年(1797)刊

歐羅巴 大洲中…(下略)
亞細亞 大洲に…(下略)
亞弗利加 大洲ハ…(下略)
亞墨利加 大洲ハ…(下略)
新墨瓦臘泥加、大南方に有、メカランといへる人初て視出せり、故に名づくといへども未開、又南「亞墨利加」の南喙ノウハメガランカ、ト云、未審。

新和蘭及新グイネヤ、共にイマダヒラケザルノ地なり。

『和蘭通船』文化二年(1805)刊

※「五大洲総説」の説明は『地球全図略説』とほぼ同じである。ただ、順序が歐羅巴・亞細亞・亞弗利加(利未亜)・亞墨利加・墨瓦臘泥加となつてゐる。

11 橋本直政

『喞蘭新訳地球全図』寛政八年(1796)

五大洲 亞細亞 歐羅巴 亞弗利加 北亞墨利加 南亞墨利加

12 墨瓦蠟泥加ヲ合テ六大洲トモ云。
森島中良

a 『蛮語箋 付録萬国地名箋』寛政十年(1799)刊

※附録の内容は「亜細亜部」「歐羅巴部」「亜弗利加部又利未亜」「北
亜墨利加」「南亜墨利加部」の五部に分けて説明されている。

b 『改増 蛮語箋 付録萬国地名箋』弘化四年(1821)刊

附録 萬国地名箋
亜細亜 欧羅巴 亜弗利加 南北米里堅 豪斯多利利

13 山片蟠桃

『夢之代』享和二年序・文政三年(1802-1820)刊

西洋人天下ヲ巡リテ、見出ス処ノ大洲三ツ。曰、亜細亞洲、曰、歐羅巴洲、
曰、亜弗利加洲。後又二ツ。曰、墨瓦羅爾加洲、曰、墨瓦羅爾加洲。是ヲ五大
洲ト云ナリ。…中略…後「アメリカ洲」ヲ分テ南北トス。然ルニ「アメリカ」
ハ離島ニシテ、限界明ラカナリ。「メカラニカ」ハ北辺バカリニシテ、南方
ハ今二分ラズ。初三洲ハミナ地ツヅキ也。一トストモ、二トストモ、三トス
トモ心ノマ、ナリ。(地理第二・十六)

14 高橋景保

a 『新訂萬国全図』文化七年(1805)刊

一、萬国別ニ四大洲。原出ニ洋説。所謂亜細亜 亜弗利加 欧羅巴 南北亜墨
利加是也。旧図於ニ南極下ニ眞墨瓦蠟泥加一洲。然其實亡ニ何有ニ也。今刪落
洋附説。

※この高橋景保の『新訂萬国全図』は「大府見存図本」即ちアロースミス
の世界図『The Map of the World (1780年製)』を原としたものという。

b 齋藤正謙『鉄研斎輜軒書目』に、この高橋景保の『新訂萬国全図』を解説して
次のように言う。便宜的にここで紹介する。

15 平山子龍

『海防問答』文化十三年(1816)著

明ノ萬曆中ニ西洋ノ利瑪竇ト云者明朝ニ来ル。利瑪竇ハ西洋意太里亜ノ人ナ
リ。其説ニ云ク。天下ニ有ニ五大州、第一ヲ亜細亞洲ト云、(下略)

16 宇田川榕菴

『善多尼訶経』文政五年(1822)刊

爾時、大聖告諸大弟子言。四大洲中。百千萬億。一切衆生。差別二種。

17 平田篤胤

『古道大意 下』文政七年(1824)刊

地球ニ有ル国ヲ。五ツニ分テ。第一ヲアジアト云ヒ。第二ヲエウロッパト
云ヒ。第三ヲアフリカト云ヒ。第四ヲ北アメリカト云ヒ。第五ヲ南アメリカ
ト云フ。凡テ是ヲ五ツノ大國ト云ヒ。是ヲ以テ五大州トモ申スデゴザル。御
國。モロコシ。韃靼。天竺ナドハ。此第一ノアジアト號ケタル大國ノ内デ。
サスレバ。御國カラ韃靼天竺ナドヲ合セタル程ノ國ガ。マダ四ツ有ウト申ス
モノデゴザル。其五ツノ大洲ヲ合セタルヨリモ。マダ海ト成テキル処ハ多イ
カラ。ナントメポーカイニ大キナ物デハ無カナ。

18 伊藤圭介

『泰西本草名疏』文政十二年(1829)刊

四大洲中、一切植物、百千万億、品類夥多。雖如奇詭變幻、不可究尽、
要皆不能出斯二十四綱之範圍矣。

19 高野長英

『夢物語』天保九年(1838)誌

イギリスと申す国は…右故、自然航海の術並に水軍、殊の外熟練致し、外国
出張所、次第に広大に相成、交易の道を漸くに旺盛に相成、凡五大州ト申、

20 比類なき様に罷成申候。
渡辺崋山

a 『外国事情書』天保十年(1839)著

古ハ一地球ヲ四分仕、亜細亜、歐羅巴、亜弗利加、亜墨利加ト定候処、又
亜墨利加ヲ南北ニ分チ、五大洲ト仕、其後見出之諸地多ク相成、四方無_レ残
審利仕候ニ付、近來南北亜墨利加ヲ一洲ト仕、大平海ヲ取集メ、是ヲ烏烏斯
答利利ト称シ、五大洲ト致候。右五大洲ノ内、亜細亜、歐羅巴ハ山ト湖ヲ隔
テタルノミニテ候得者、一洲ト定メ候テモ可_レ然地勢ニ御座候。

b 『再稿西洋事情』天保十年(1839)著

一、地球中大別致、五大洲と相定め候共、其実は欧羅巴・亜細亜は一洲にて、
亜弗利加と亜墨利加と三大洲に御座候。外に近來「アウスタラー」を数へ
入候共、これは島地にて、右三洲と並称するにも不_レ及候。

21 佐久間象山

「ハルマ出版に関する藩主宛上書」嘉永二年(1819)

当今の如く、五大州一続きになり候様の事、開闢より未曾有烏の事と御座候。
期する所は五大州の學術を兼備し、五大州の所_レ長を集め、本邦をして永く
全世界独立の国とならしむる基礎を世に弘めんと…

「松田豊前充とみられる書翰」文久二年(1862)

当今経済有用の学は、和漢の学の上に西洋の諸学科に通じ、五大州を綜括し
候大識量を具し候にあらざれば、其の有用の学とは申し難く候。

『省魯録』安政元年(1854)〜天治元年(1864)誌

予年二十以後、乃知_レ匹夫有_レ一國。三十以後、乃知_レ有_レ繫_三天下。四十以
後、乃知_レ有_レ繫_三五世界。

22 新発田収蔵

『新訂坤輿略全図』嘉永五年(1852)刊

古図南方ニ墨_二瓦蠟_一大洲ナル者ヲ置テ坤輿ヲ六大洲ニ分ツ。近世西洋人南規外
ヲ航行スル者少シトセズ、新和蘭、新入匿ノ外ニ大洲ノ無_レヲ發明スルニ至_レ
リ。今新和蘭、新入匿及ビ其他無数ノ諸島ヲ總テ南島嶼洲ト名テ五大洲ニ算
入ス。

23 柳川春三

自作端唄(黒船来航の嘉永六(1853)年頃の作か)

万国の国づくし、アジャ、アフリカ、エウロッパ、アメリカにアウスタラー

の外名高き国は唐天ちく、じやがたらせいろん、はるしや、あらびや、だつ
たんとるこ、おろしやしべりや、ふらんす、どいつ、おらんだ、いきりす、
ぶろいせん、いすばにや、ずゑしや、ぎりしや、ぼるとがる、合衆国にはわ
しんとん、めきしき、ぺえりう、ぶらじりやにころんびや、シリ、バタコン

24 柳川重信

『改正海外諸島図説』嘉永七年(1854)刊

渾地五大洲
唐土天竺韃靼等属_三此大洲_一
亞細亞洲
利未亞洲 自_三天竺_二西方_一至_三南方_一之界_一
歐羅巴洲 在_三天竺_二之西北_一一界_一
亞墨利加_{南洲} 在_三於日本東南_一之大界_一 或分_三南北_一
墨瓦蠟泥加_{北洲} 自_三赤道_二至_三南極_一之一大界_一 而為_三兩洲_一

25 吉田松陰

『清国咸豊乱記』安政二年(1855)誌

寅、五大洲を周遊して諸国勦すべく撫すべきの形勢を初め、風教攻守等迄研
究し、大面を立てんと欲せしに、天助けず、人祐_{たす}けず、遂に茲に至る。

26 新島襄

「元治甲子元年於駿台川勝君之塾書焉」元治元年(1864)

一襲弊袍三尺劍 回頭世事思悠悠 男兒自有蓬桑志 不涉五洲都不休

27 斎藤拙堂(1805年没)

『地学學要』刊行年不明

五大洲 亜細亜、欧羅巴、亜弗利加、亜墨利加、豪斯杜辣利
2-3

湯澤信太郎氏によると、鎖国時代の世界地理学のタイプは三つに分けて考えるこ
とができるという(『新井白石の世界地理研究』六六〜七頁)。その第一は「学問的
に正しい世界を教へ、人々を世界的に目覚めしめ、世界の中へ置かれた日本を教へ
るもの」であり、第二は「鎖国的にゆがめられて馴化され、常軌を逸した」もので
あり、第三は「国学者や仏僧の側にあつたもので、自説を權威づけ、自説を保護し
ようとするもの」である。前節に掲げたものほとんどは、第一のタイプに属する
者の著作あるいはその精神を共有する者の著作に見られるものである。例外は17の
平田篤胤のものが第三グループに入り、24の柳川重信(江戸の浮世絵師)のものが

が出来た当初から、中国においても見られたものである。例えば万曆三十年(1602)の序文のある『月令広義』所載の『山海輿地全図』の説明は『坤輿萬国全図』に載せるものとはほぼ同じであるが、「以地勢分輿地」為「六大州」、曰「歐羅巴」、曰「利未亜」、曰「亜細亜」、曰「北亜墨利加」、曰「南亜墨利加」、曰「墨瓦臘泥加」とある(鮎澤信太郎『東洋地理思想史研究』五九頁)。

②について。この捉え方もまた、早く西川如見や新井白石の著書から見られ(西川如見の『増補華夷通商考』の世界図は端的にそれが表されていると言える。稿末の【地図Ⅱ】参照)、その後も三浦梅園、山片蟠桃、渡辺華山によって繰り返し述べられているものである。三浦梅園は先に引用した『帰山録』の文章の後に次のように言う。「亜細亜、歐羅巴は何ゆへ其界を分ちたるか。且大洲五の名目これを我邦の言翻せば何と云訳にや、前よりしばしば人に問ひ、此度も舌人に問へども、その故を知る人なし」(「舌人」は通訳者の意)。

この①②の議論は節を改めてなお考えることにする。

2-1-4

「大州」を文字どおりに理解すれば四方を海に囲まれた大陸であるが、大航海者によって発見されたのは、その大陸であった。したがって、コロンブスによって発見された地は、新たに発見された南アメリカと狭く長い地で接続していることが明らかになると、一つの大陸として扱われるようになる。マゼランによって発見されたメガラニカも、山片蟠桃の言うように「北辺バカリニシテ、南方ハ今二分ラズ」という状態であったが、「大地也ト思ヒテ、ツイニ一洲トス。」ということであったであろう。

大航海時代以前に知られていたアジアとアフリカはヨーロッパと陸続きであり、人文学的にも厳密な境界は引けないものであった。中世ヨーロッパにおける世界はアジアとヨーロッパとアフリカの三つからなっているが、アジアとヨーロッパとの境界はタイナス川(ドン川)と黒海とされ、アフリカとヨーロッパとの境はナイル川と地中海とされるが、これらは便宜的に設けられた境界であった。利瑪竇はそのような考え方を踏襲した上で、ヨーロッパ、アジア、アフリカを「大州」と説明しようとしたように思われる。前掲のように『坤輿萬国全図』には「以地勢分輿地」為「五大州」とあり、ヨーロッパ、アジア、アフリカの各州のそれぞれの四方に海や川や湖があることを強調しているからである。

若「欧羅巴者、南至地中海、北至臥蘭的亞及氷海、東至大乃河墨何的湖大

海、西至大西洋。

若利未亜者、南至大浪山、北至地中海、東至西紅海仙勞冷祖島、西至河摺

亞諾滄、即此州只以聖地乃下微路与亜細亜相聯、其余全為四海所圍。

若亜細亜者、南至蘇門答臘呂宋等島、北至新曾白臘及北海、東至日本島大

明海、西至大乃河墨何的湖大海、西紅海小西洋。

しかし、「微路」与「亜細亜相聯」と説明されているリビア(アフリカ)をアジアと切り離して一つの大州とすること、「亜墨利加者全為四海所圍。南北以微地相聯。」と説明される南北のアメリカを一つの大州とすることは一貫しない説明であると言わなければならない。特にヨーロッパとアジアおよびアフリカとを区別するキリスト教的な世界観を理解しない日本や中国の人々には、この区別は納得しがたいものであったに違いない。三浦梅園の「亜細亜、歐羅巴は何ゆへ其界を分ちたるか。且大洲五の名目これを我邦の言翻せば何と云訳にや」という問いは当然であった。この問は現在でも容易に答えることのできないものであろう。

3 「五大州」その後

オーストラリア州が描かれた新しい世界図が日本に紹介されてからも、民間では幻のメガラニカ州が描かれた世界図が流布していたように、「五大州」の一つとしてオーストラリア州が数えられるようになるのには長い年月が必要であった。明治以降も昭和初期までの主な辞書においても「五大州」にオーストラリア州は入っていない。例えば、『辞林』(明治四十四年刊)には、

地球上の五つの大陸、即ち、「アジア」・「アフリカ」・「ヨーロッパ」及南北「アメリカ」の称。

とあり、『辞林』が増補され『広辞林』になっても確認できたところでは昭和五十八年の第六版でも同様である)、『言海』には「五大州」は見えないが、それを増補した『大言海』(昭和八年刊)でも

亜細亜 欧羅巴 阿非利加 北亜米利加 南亜米利加ノ五ツノ大洲とある。

オーストラリア州が「五大州」の一つに数えられるようになるのは、管見では『大日本国語辞典』(昭和十四年修訂版)が最初である。

地球上の五つの大陸、即ち、亜細亜・阿非利加・欧羅巴・亜米利加・濠斯太刺利亜の称。又、濠斯太刺利亜を除きて亜米利加を南北に分ちてもいふ。

以降、同様の説明が現在に至るまで取られている(確認できたところでは『辞海』

昭和四十九年版、『日本国語大辞典』昭和四十九年版、『角川国語大辞典』昭和五十八年版、『言泉』昭和六十一年版、『大辞林』平成十八年第三版など。

ところで、注目されるのは、『広辞苑』の初版(昭和三十五年)では『辞林』などと同じ説明がなされているが、第四版(平成十三年)からは説明の最初の「地球上の五大大陸、即ち」という部分が省かれてきていることである。これは次のような人々の認識の変化を反映したものと思われる。

「大洲」という言葉だけから判断すると、世界は四つもしくは五つの大陸から成っているということになるが、実際にそのように理解したと思われる例がある。写本の形でのみ伝わる大槻玄沢『環海異聞』(文化四年1807)に載せる世界地図はヨーロッパとアジアとアフリカはそれぞれ独立した大陸として描かれている(稿末の【世界図IV】参照。ただし、掲げたものは新村出旧蔵重山文庫所蔵のものであるが、この図には後から朱でヨーロッパとアジアとを繋ぐ線が引かれている。「ヨロシヤ国府」と書かれた部分の右上また右下方の黒く写っている横線がそれである)。明治期以降の辞書が「五大州」を五大大陸と説明するのも、そうした言葉の意味に引きずられたものではないかと疑われるが、ともあれ、その結果「五大州」は地球に存在するところの全大陸であり、「五大州」は世界そのものを意味することになる。

『角川国語大辞典』(時枝誠記・吉田精一編)にも「五大州」の二番目の意味として「転じて、世界」とある。ちなみに佐久間象山『省魯録』に「五世界」とあるが、この「世界」は五つで地球(渡辺華山『外国事情書』を形成しているものであり、異なる意味である。前掲西川如見の文章に「萬国各々五大洲の内に在り、亦許多の島嶼は各々その界洲に属す。俗の所謂世界とは異なり」とあったが、その違いを言っているであろう。

この世界を意味する「五大州・五大大陸」は、ヨーロッパとアジアをそれぞれ一つの「大州」とした利瑪竇以来の慣用でしかないが、ヨーロッパとアジアが陸続きの一つの大陸であることを明確に意味する「ユーラシア大陸」が作られると、その根拠をまったく失ってしまう。「ユーラシア」は『広辞苑』の初版では「ヨーロッパとアジアの総称。亜欧州。」と説明されているが、第二版(昭和四十四年)からは「ヨーロッパとアジアの総称。亜欧州。——大陸」になっているのは、「五大州」の説明から「地球上の五大大陸、即ち」という説明が消える伏線であるように見える。

現在ではもはや「五大州・五大大陸」は世界を意味する語として一般には使われてはいまい。敢えて言えばオリンピックマークの五輪にその痕跡が認められるぐらいであろうか。五輪のマークは「五大州・五大大陸」からなる世界のシンボルとされる(「オリンピック憲章」の第一章第三項の③に「The Olympic symbol represents

the union of the five continents and the meeting of athletes from throughout the world at the Olympic Games.」とある)。この五輪のマークが制定されたのは今から九十五年前の一九一四年である。

【出典一覽】

- 1 西川如見『日本水土考』(岩波文庫)
- 2 新井白石『采覧異言』(『新井白石全集』国書刊行会編)
- 3 松村元綱『和蘭地図略説』
- 4 平賀源内『火浣布略説』(重山文庫所蔵本)
- 5 杉田玄白『解体新書』(出版科学研究所による復刻版)
- 6 三浦梅園『原價』
- 7 前野良沢『管蠡秘言』(岩波思想大系64『洋学・上』)
- 8 林子平『輿地国名訳』(『新編林子平全集』第一書房刊)
- 9 大槻玄沢『環海異聞』(重山文庫所蔵本)
- 10 司馬江漢『輿地略説』(『司馬江漢全集』八坂書房刊)
- 11 橋本直政『噶蘭新訳地球全図』(重山文庫所蔵本)
- 12 森島中良『蛮語箋』、『改増 蛮語箋』(重山文庫所蔵本)
- 13 山片蟠桃『夢之代』(岩波日本思想大系43)
- 14 高橋景保『新訂萬国全図』
- 15 平山子龍『海防問答』
- 16 宇田川榕菴『苦多尼訶経』(牧野富太郎『植物集説』所載)
- 17 平田篤胤『古道大意』(『平田篤胤全集』)
- 18 伊藤圭介『泰西本草名疏』(井上書店による復刻版)
- 19 高野長英『夢物語』(『高野長英全集』同刊行会)
- 20 渡辺華山『外国事情書』(岩波日本思想大系55)

- 21 『慎機論』(岩波日本思想大系55)
- 『西洋事情書』(岩波日本思想大系55)
- 佐久間象山「ハルマ出版に関する藩主宛上書」(岩波日本思想大系55)
- 「松田豊前充とみられる書翰」
- 『省魯録』(岩波日本思想大系55)

22 新発田耘『新訂坤輿略全図』

23 柳川春三作端唄(東洋文庫・今泉みね述『名じりの夢』「黒船さわぎ」)

24 柳川重信『改正海外諸島図説』

25 吉田松陰『清国咸豊乱記』(『吉田松陰全集』岩波書店)

26 新島襄「元治甲子元年於駿台川勝君之塾書焉」(『新島襄全集』同朋社出版)

27 斎藤拙堂『地学學要』

右に依拠したテキストを示していないものは全て次の鮎澤信太郎氏の著書による。鎖国時代の世界地理学についての本稿の著者の知識は主にこの四冊を土台とする。

『鎖国時代の世界地理学』昭和八年一月、日大堂書店

『東洋地理思想史研究』昭和十五年七月、日本大学第三普通部

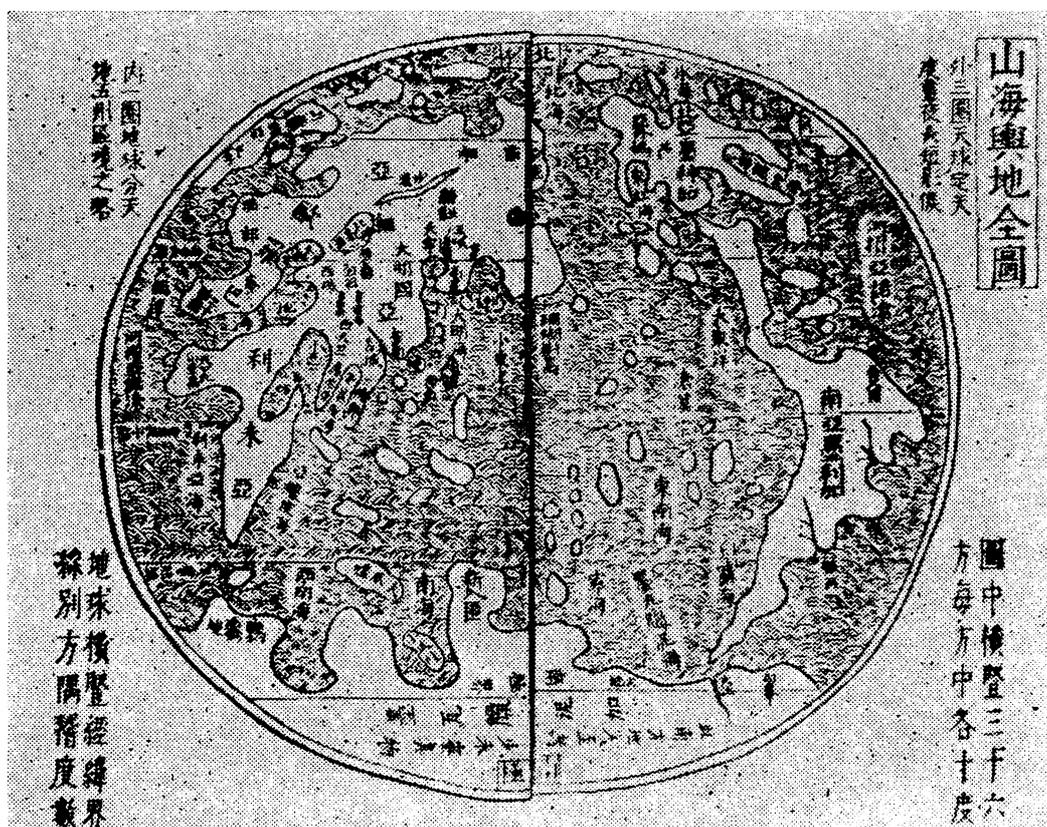
『日本文化史上における利瑪竇の世界地図』昭和十六年四月、日本大学新聞社

『近世日本の世界地理学』文化選書昭和二十三年八月東光協会出版部

(2009.7.28稿)

初校後、西川如見の『日本水土考』所載の地図は欧羅巴と利未亜、利未亜と亜細亜とを明確に線で区切っていることに気づいたので【世界図Ⅴ】として掲げる。

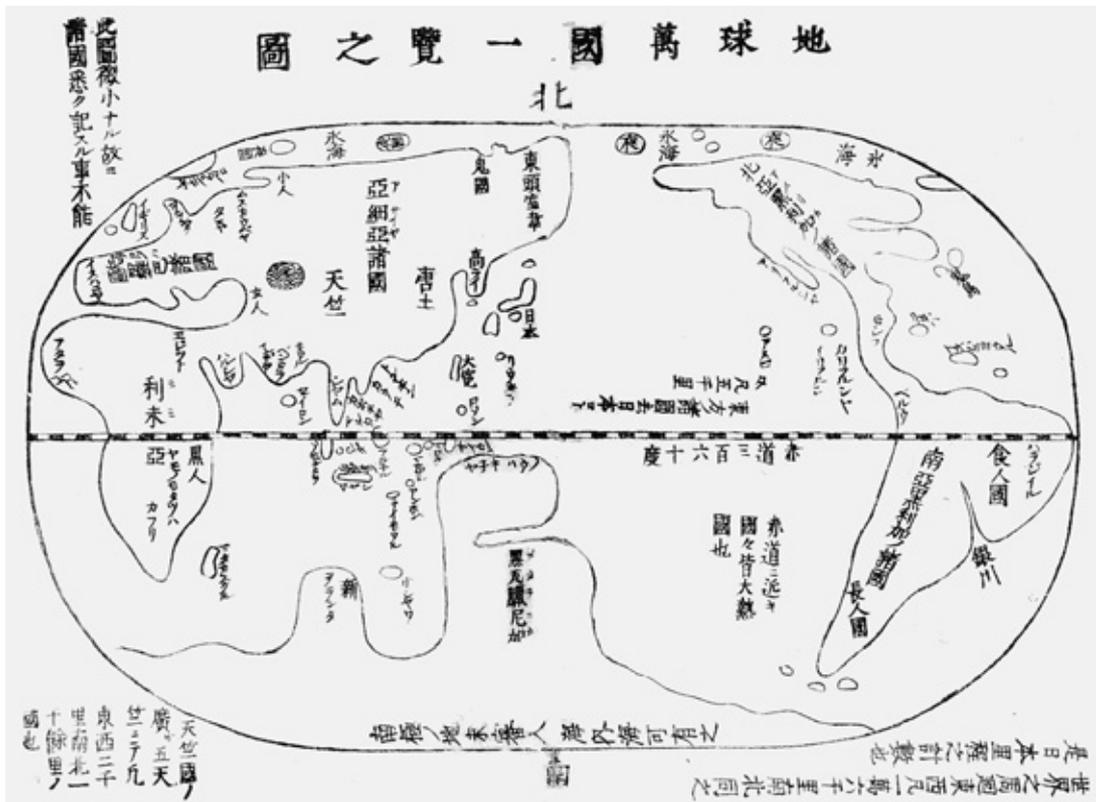
(2009.12.9稿なし)



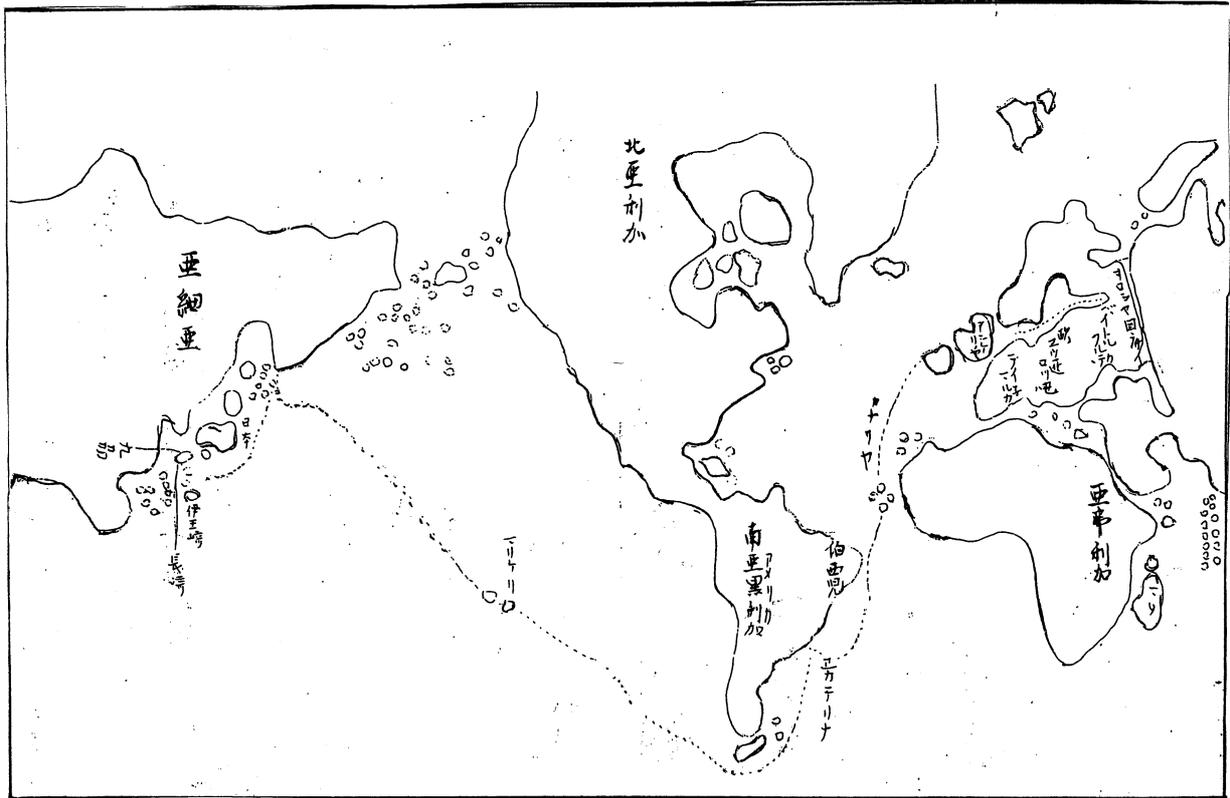
【I】利瑪竇『山海輿地全圖』(平川祐弘著『マテオ・リッチ伝1』東洋文庫より)



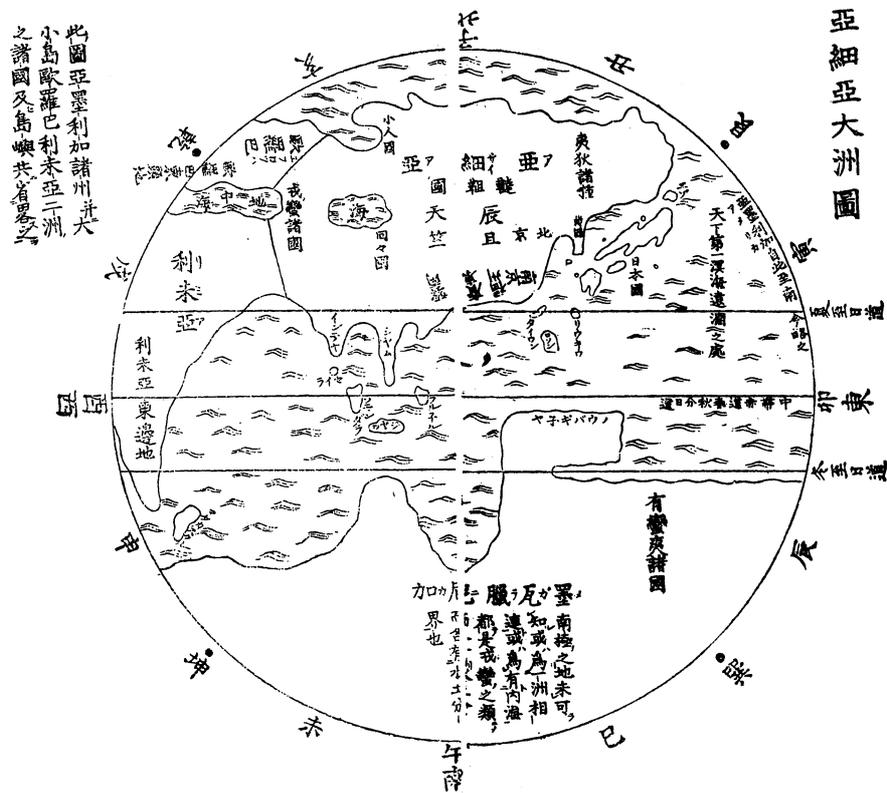
【II】利瑪竇『坤輿萬國全圖』（宮城県立図書館蔵）



【III】西川如見『增補華夷通商考』所載「地球萬國一覽之圖」（重山文庫蔵）



【IV】大槻玄沢『環海異聞』所載世界地図（重山文庫蔵）



【V】西川如見『日本水土考』所載「亞細亞大洲圖」（岩波文庫より）